

臼杵藩藩学における子弟教育の様相

——士族起業家莊田平五郎の行為規範の一形成因子として——

竹 村 英 二

はじめに

莊田平五郎（1847～1922）は弘化四年、豊後国臼杵の地に、同藩藩儒莊田雅太郎の長子として生誕した。慶應三年（1867）、藩命による英学修行のため江戸へ出、青地信敬塾に入塾（二〇歳）、同四年（明治元、1868）四月には維新の動乱を避けて鹿児島開成所へ転学、明治三年正月には再び東京に戻り、慶應義塾に入塾、既に相当水準の英語力を有していた莊田は、四ヶ月後には同塾教師に抜擢されている⁽¹⁾。

莊田は明治八年二月に三菱会社に入社、翻訳係、次いで会計係を兼ねる。入社直後よりただちに社則（「三菱汽船会社規則」）の制定に関わった（五月に発表）のち、続いて複式簿記の導入に尽力、「郵便汽船三菱会社簿記法」を制定、その後も同社の経理、財務体系の近代化に尽力した。明治十八年（1885）の日本郵船設立時に三菱側代表として同社理事に就任、翌年の三菱社再発足時に同社支配人となり、明治二十一年には同社管事（従業員として三菱で最高位）兼本社支配人となった。莊田は、岩崎弥太郎の後をうけた弟弥之助、弥太郎の長子久弥の社主二代にわたり支配人、管事として、三菱が海運業から撤退後、鉱業、造船業、銀行業、地所事業、商事事業等へ多角的に展開するにおいて、とりわけ銀行、地所事業の本格的展開、造船業を軸に重工業にウェイトを置いた財閥として三菱が発展してゆくに大きく貢献した明治の企業者である。さらに東京海上保険、明治生命保険、東京倉庫の設立に貢献、これら三社と日本郵船等取締役も兼務した。また、明治二〇年ロンドン滞在時、シティーに模したオフィス街、金融街開発のための丸の内地区買収を建議、これが現在の丸の内の端緒である⁽²⁾。

三菱は1890年代半ばに長崎造船所を政府から買い取り、船舶修繕を主としていた同造船所を6000トン級船舶の新造が可能なものとするべく整備し、莊田は所長として長崎に赴任、必要な技術の導入、造船における原価計算も含めた工業簿記の導入、さらには雇用人扶助法、職工救護法等労務管理制度の制定、工業予備校の設立も手掛けた⁽³⁾。また、社外、グループ外においても、日本勧業銀行設立委員、東京商業会議所特別会員、大蔵省貨幣制度調査会委員、文部省東京高等商業学校商議委員等の要職を歴任した。

かような企業者としての経歴故に、莊田は大財閥の大番頭として後世においては記憶されている。しかし彼は、天保十年代（1839～）以降学府としての充実が図られて久しかった臼杵藩藩学「學古館」にて学を修めた藩儒の長子であった。學古館は、天保二年にはじまる村瀬庄兵衛（大夫、翫鷹、

1784～1862) 主導の白杵藩天保改革の一環として、それによる藩財政改善を基盤に整備がはじめられる。天保七年に「學古館」の名がみえ、天保十三年までに学舎を整備、同年正月に諸規定の抜本的整備が行われ、「藩学」としての体裁整う。村瀬の進言により江戸遊学をした武藤祝(虎峰, 1810～65), 稲葉徳一郎(大壑, 1807～57)の学頭二人のもと、弘化、嘉永、安政期を通じて安定的な発展をみた。萬延元年には、中津藩儒であった白石照山が学頭となった。

莊田の父雅太郎は、天保九年(1838)より「學古館」童子生素読師、同十三年(1842)より素読手習師、嘉永元年(1848)頭取助講、嘉永五年素読師頭取(白杵藩学頭に次ぐ地位)を歴任した⁽⁴⁾。莊田(平五郎)の四代前子謙は、徂徠、服部南郭に学び、『先哲叢談』に名を列ねる徂徠学の碩学である⁽⁵⁾。即ち企業者莊田平五郎は、徂徠学を奉じる藩儒の家系に生まれ、安政二年(1855)に「學古館」に童子生として入学(八歳)し、萬延元年(1860)に同館冠学生となった(十三歳)ものであり、二〇歳(1867)で藩命をうけ江戸の青地信敬塾にて英学修行をはじめ、安政期から慶應年間までは、古註学、徂徠学を奉じる教授陣のもと漢学を修めた学徒だったのである。

従ってかような経歴を有する企業者莊田の思惟の基底の解明には、(1)幕末期藩学での教育、とりわけ莊田が直接教をうけた儒者の教義特性と彼らによる教育の様相の考察と、(2)それと莊田の思惟を吐露する著述物との比較検討が不可欠である。本稿は、白杵藩学の成立と発展、それに同藩儒学教育の学統的、教義手法的特性の整理を試みるものであり、莊田の思惟の基底研究のための基礎的作業と位置付けられるものである。

白杵藩『会所日記』、『稲葉家譜』にみる藩学「學古館」の成立と発展

文部省総務局編纂の『日本教育史資料』(以下、『教育史資料』)⁽⁶⁾は、各藩の教育事情の発展の様相を網羅的に呈示するものであるが、この巻八(第三分冊)に、白杵藩藩学「學古館」,「集成館」の成立・発展とそこでの教育についての記述がある。このもととなった史料は、主に同藩『会所日記』と『稲葉家譜』である。『会所日記』は藩政の日々の施政、出来事の実をまとめたもので、現在まで三百二十冊をとどめる⁽⁷⁾。白杵藩主稲葉家歴代の事蹟をつづった『稲葉家譜』には、藩学発展期(主に天保十年代、後述)の様相の記述がある⁽⁸⁾。これら基礎史料をもとに藩学発展の系譜をまとめた最初の研究は、久多羅木儀一郎氏による「白杵藩学史」上・中・三(下)である⁽⁹⁾。木原七郎『白杵藩教育史』も『会所日記』、『稲葉家譜』記載の藩学関係記事の詳細な検討に基づき、藩学「學古館」,「集成館」における人員、学務・教務内容の発展過程、設備拡充などについて周至な整理を試みるものである⁽¹⁰⁾。このほか、久多羅木氏の「白杵時代考」一(文政元～弘化二年)、二(弘化三～慶應三年)、『白杵藩立学校沿革』にも藩学関係の記述がある⁽¹¹⁾が、『会所日記』の藩学関係記事の具な蒐集を基礎作業とする、最も信頼に足る研究は久多羅木「白杵藩学史」と木原氏の書である。本稿では、『会所日記』、『稲葉家譜』の精査を行う。特に莊田父子に関する事項を含めた學古館人事に関する記事について先行研究を参考にしながら考察し、白杵藩学の発展の様相を整理し、さらに特に儒学教育における学統的特性、教育過程の特徴を考察する。無論、藩学教育の個々の藩士への浸透の度合、そして個々の武士がどれだけ真摯に教義を受容せんとしていたかは千

差万別であるが、莊田は藩儒の長子であり、かつ江戸、鹿児島への藩費留学に選抜されるに至る成績を残していた。莊田が「童子生」として教育過程に入った八歳時（安政二年〈1855〉）から十四歳時（文久元年〈1861〉）まで、およびそれ以降冠者生（元服者）となってからの数年間の計十年間余の学的環境は、この理由故に彼の思惟形成に一定の影響があったと考えられるべきであろう。

a) 『日本教育史資料』にみる白杵藩学の様相

『教育史資料』の「舊白杵藩」の「学制」の項には「士族卒の子弟教育方法」とあり、「上侍の子弟は必藩校に入學せしむ 餘暇を以家塾に入るものは其意に任す 小侍以下は請願に依り藩校に入らしむ 其家塾に学ふは固より随意たり 又俊秀の子弟は藩費を以遊學せしめしことありと雖制規あるにあらず 藩士をして講釈聴聞せしむるの制は文化元年以降之を行へり」とある⁽¹²⁾。また「沿革要略」には「古来一定の學制なく 藩士中篤志の者公務の餘暇に修学し稱学に長し師となるに足る者は自家に於て藩士の子弟を教導し 或は習字のみを教授する者も往々之れあり」とある⁽¹³⁾。早くから学的環境の充実がみられた幾つかの藩に比べ、白杵藩学の教育環境の整備は必ずしも先進的とはいえず、随分と鷹揚であった様子がうかがわれる⁽¹⁴⁾。しかし、天保期のはじめより本格化した村瀬大夫主導の白杵藩における天保の改革⁽¹⁵⁾の一環として、とくに天保七年以降は藩学教育の充実が夙に計られたことは後述する。

『教育史資料』には白杵藩校の名が「集成館」であったとするが、この名に変更されたのは明治元年のことであり、木原氏の書に既に指摘があるように、白杵藩の評定所にて儒学教育が本格化したのが享和元年（1801）頃、「學古館」の名称がはじめてあらわれるのが天保七年（1836）であり、以来、白杵藩学は江戸後期～幕末を通じて「學古館」として発展をみた⁽¹⁶⁾。また、『教育史資料』には「天保十三年二月一大校舎を白杵町字洲崎の総役所（従来各所に散在せし諸局を集めて一郭となす 是を総役所と稱す）郭内に設け階下は各場に劃し武技を講し講武場と稱し 階上を文學舎に充て學古館と稱し武藤稲葉兩人を以て學頭となす」とする⁽¹⁷⁾が、この記述も精緻さに欠ける。即ち洲崎の総役所が増築され、評定所で行われていた会読等がこの建物の二階で実施されるに至ったのは天保七年（1836）のことである。木原氏はこれを「學古館」の端緒とし、その本格的発展は天保十三年の校舎の新築とカリキュラムの抜本的充実にあるとする⁽¹⁸⁾。また『教育史資料』には「初め文學場を學古館と稱し 武藝場を講武場と稱する一館あり 後別に文館を設け集成館と稱し學古館の事業を移す」とある⁽¹⁹⁾が、この記述も精緻でないのは上の理由による。木原氏は『稲葉家譜』等にある學古館の経始が天保十三年とするのを、『会所日記』の記事をもって糾すが、藩政の動き、施策の諸々を忠実に記録したものは『会所日記』であり、『稲葉家譜』等や、それを鵜呑みに綴ったとみられる『白杵藩立学校沿革』、それに『教育史資料』よりも、『会所日記』を忠実に追って発展の系譜をまとめた木原説が最も適切と考えられよう⁽²⁰⁾。

『教育史資料』にはさらに、「本藩（白杵藩一筆者）は武技を練習するを以て主務となし余暇を以て文学を修めしむるの旨趣にして壮年の者文学を偏修するか如きは容易に許さ、る所」⁽²¹⁾であり、「文武共に振ひ士風協和」したのは「集成館」成立（明治元年）後であったとの記述を載せる⁽²²⁾。

確かに、白杵藩は「軍學」の教育において楠流，謙信流，甲州流，山鹿流を，弓術に竹林流，吉田流，日置流，雪荷派を，槍術には種田流，實藏院流，飯篠流，那須流，明得流を擁し，兵学，武術教育において小藩としては稀な諸派割拠の様相を呈していたといえよう⁽²³⁾。しかし，天保十年代以降の「學古館」の充実の様子も勘案すると，武道，兵学教育の重視と平行して文，とくに儒学教育の充実が図られ，明治元年の「集成館」成立の二十年以上前より「文武共に振ひ士風協和」するを武士教育の枢要としていたといえよう。

b) 「學古館」の成立発展と教授陣の充実

「學古館」の整備の端緒は，第十一代藩主稲葉雍通の治世にはじまるが，享和元年（1801）九月朔日の『会所日記』には以下がある。

「今日於会所，御番頭御用人江月番左之通及口達

是迄御家中，年若之類，心懸武術學文等，出精之段先達而御直書を以茂被仰出候通被成御承知，御満足被思食候。然共御勝手向，御難渋に付，一統御宛行嚴鋪被減置候御時節に付假令志有之者茂，銘々於宅会読等相催候儀，不任心底儀茂可有之哉と，此段別而御心勞被思召候。付而者志有之面々者，此節評定所御普請茂出来に付，不差問節者，右之場所被成御貸候間，勝手次第罷出候」

「武術學文等」の振興にむけ，祇園洲に新たに落成した評定所の使用を奨励しているが，さらに具体的に，

「尤軍學之儀茂右同所被成御貸候間，勝手次第可罷出候。且又御医師中，医学之儀，同所被成御貸候間，是又勝手次第可罷出候（中略）且又此節武術稽古所，多福寺下明地ニおいて，可也之造作被仰付候間，諸流師範之面々申談，不差問様，繰合可罷出候」

と，軍学，医学，武術稽古を奨励し，さらに「於同所会読等」を行うことを謳う。『会所日記』にはさらに具体的な会読実施のための部屋割り，劍術，弓術稽古の場所と時間の割り当て等を記すが，この享和元年九月朔日の『会所日記』は，白杵藩における文武双方における教育過程の制度化の端緒を示すといえよう。木原氏はこの整備の状況は，弘道館（佐賀），學習館（和歌山）等に代表される「講堂型藩校」と軌を一にするとする⁽²⁴⁾。

享和三年（1803）十一月ならびに文化二年（1805）八月四日の条に各々「一，同所三ノ間（中略）右同断の節，各儀前髪之類え講釈の儀」，「一，同所三ノ間（中略）右同断の節，各儀前髪之類え評定所儒学講釈被仰付候（中略）各儀，評定所儒学素読指南被仰付候」とあり，十四歳以下の童子への儒学教育の開始が記録されている。このほか，藩学の整備の端緒が主に享和元年から文化二年にかけてあり，その後天保七年（1836）に「學古館」の名称があらわれ，天保十三年の洲崎移転を契機に同藩学がさらに拡充された様子は，木原氏の書に詳しく描かれている⁽²⁵⁾。

さて、白杵にて藩立学校の体裁始めて整ったのは天保十三年（1842）とするのは久多羅木氏、木原氏の研究も同意するところだが、以下、とくに儒学教育において、どの学統の人材がどのような教材を使い、いかに教育にあたっていたかを考察しよう。

『会所日記』天保八年（1837）六月四日の条に以下のようにある。

「一、於同所（会所）三ノ間 池田市太夫、牧田弥三郎、中島賢三郎。

各儀、學古館冠者講釈並世話取被仰付候。是迄被仰付置候面々申談、相勤可被申候。小川鐵之助、中村権九郎、丹羽庫三郎。

各儀、學古館童子講釈被仰付候、是迄被仰付置候面々申談、相勤可被申候。稲葉栄三郎、田原篤太郎。」

さらに天保九年二月二十七日の「於同所」との欄に、

「一、三ノ間

堤卯八郎。各儀。學古館童子講釈師被仰付候、是迄被仰付置候面々申談、相勤可被申候。庄（莊）田雅太郎、山口熊五郎。學古館童子素読師被仰付候、是迄被仰付置候面々申談、相勤可被申候。」

とある。上で注目すべきは童子講釈師に任命された稲葉栄三郎と素読師任命の庄田雅太郎である。栄三郎は後、「學古館」学頭となる稲葉徳一郎の実父であり、雅太郎は前述したように莊田平五郎の実父である。白杵市立図書館には、旧白杵藩「藩士系図」があり、莊田家の家系図もこれにある。それをみると、莊田家が代々、儒学もさることながら医術を家業にしていたことがわかる⁽²⁶⁾。同家の人物で儒者として最初に名を馳せたのは、平五郎より四代前の莊田子謙（允益、1683～1759）であり、さきに触れたように『先哲叢談』後編卷之五にもその名をとどめる。

「莊子謙 名允益字子謙以字行。通称平五郎（中略）至父立允。始以文学與医術。仕于水府支封某候。有故致為臣而去。後仕于白杵（中略）子謙少而好学。昼夜不釋卷。叔父深寄愛之令遊学平安。数年而歸。白杵候学為儒官。專修宋儒之説。後従う候駕来江戸。嘗見服南郭。大服其学説。悉棄舊習学于修辭。歳三十余也云。子謙自少壯好遊。足跡遍于関左。嘗以寛保元七月登富岳。遂有芙蓉記行之作。其文簡奥。所謂古文辞者。我邦近来所稀也。服南郭余熊耳大賞之（後略）」

かく、子謙は宋学を修めた後、徂徠に直接師事し、のち服部南郭のもとに学び、その学問は「服南郭余熊耳大賞之」程のものであったとされている。また、同じ南郭門下でもあった湯浅常山らとも交友していた。徂徠学は平五郎の父雅太郎まで継承され、平五郎執筆の「手記」（明治四年）にもその素養の一端が垣間見られるのは、拙稿「士族起業家莊田平五郎の行為規範 — 古註学・朱

子学・徂徠学の兼採とその起業者的転回」⁽²⁷⁾にて論じる。

その雅太郎、天保十三年には新たに素読手習師に任じられている。平五郎誕生（弘化四年<1847>）の十年ほど前であるこの時期に、雅太郎や稲葉栄三郎など、この世代の学識者が充実しつつある藩学の儒学教授陣に名を連ねはじめている様子が推知される。

白杵藩藩政改革を主導した村瀬大夫は藩学の充実にも腐心した人物であったのは述べたが、儒学講師陣拡充策の一環として、若手の江戸遊学制度が設けられ、天保九年、既に冠者儒学講釈世話取の地位にあった稲葉徳一郎と武藤祝（虎峰）の二人が、後日学頭の重責を担うことを睨んで出立せられた。以降、稲葉は天保十二年の暮れまでの四年弱、武藤は翌十三年三月までの四年二ヶ月の間、江戸で勉学に励んでいる。『会所日記』に曰く、

「一、於同所左之通月番及口達。

稲馬（葉）茂右衛門（徳一郎）、武藤太右衛門（祝）

各世倅共、儒学別て出精に付、追ては学頭可被仰付思召に候。付ては存寄の先も有之、遊学相願候ば、其通可被仰付旨候。」[天保九年二月]

稲葉はさらに、江戸から帰藩した翌年三月に早くも再び他藩に遊学する。天保十四年三月四日の『会所日記』にいわく、

「一、武藤祝儀。日出家中帆足里吉（万里一筆者）方へ為遊学三廻り逗留罷越度尤以折々逗留罷越度旨願之通」

当時日出藩にあった帆足万里のもとへの遊学だが、天保十年代以前の白杵藩では、かような頻度での他地への派遣は例がなかったと木原氏は指摘する⁽²⁸⁾。荘田平五郎もこの制度に則り、後年江戸遊学をはたすが、荘田が遊学生候補に挙がった慶應二年（1866）当時は既に、洋学修得の必要性の認識が全国的に高まって久しく、荘田の遊学先は青地信敬塾（慶應三年入塾）と相成った。その後鹿児島開成所への遊学（明治元年）、さらには慶応義塾入塾（明治三年）が実現したが、このような学的研摩のための留学、遊学制度の始まりは、白杵藩においては天保九年、村瀬による藩政、学制改革の最中であった。

江戸では、稲葉、武藤ともに東條一堂に学び、稲葉はさらに亀田鵬斎の長子綾瀬に、武藤は村田春野に学んだ。一堂は十二歳から十年間、皆川淇園に学び、帰府後は亀田鵬斎に師事、さらに清朝考拠家の学にも通じ、汎く学統の異なる学徒との交わりを続け、諸学の詳細な比較検討を基盤とする考証学を確立した幕末碩学の一である⁽²⁹⁾。東條一堂、それに学んだ稲葉、武藤の折衷学、そして荘田子謙以来同家が奉じた徂徠学が、荘田の思想的基底にどのような影響を及ぼしたものであったかは別稿（註27参照）にて検討する。

久多羅木氏、木原氏とも、学古館および講武場各々が独立の学舎をもつに至り、講義、輪読等の

方法他学習方法の諸規定、講武の規則など様々な面におけるルールの整備がなつた天保十三年(1842)を、白杵における藩学教育の一画期とする。これは荘田が童子生としてその門をくぐる十三年前であるが、とくに同年正月の諸規定は細部にわたるものである。以下、木原氏の研究にも引用されている『会所日記』正月十一日の条の主要部分を掲げる。

「一、於同所三ノ間、小川三郎兵衛

御自分儀、未氣勢も宜に付、御会読の節、且學古館会読の節、是迄の通罷出候様被仰付候。左様可被相心得候。(後略)

さらに同月十三日の条文に、以下がある。

一、於同所の三ノ間。

小川鐵之助、丹羽矢司馬、岡田半蔵、稲葉徳一郎、中村権九郎、中島賢三郎、芝清多仲。

惣御役所学古館ニおいて、御家中子供素読手習被仰付候。右ニ付各儀頭取被仰付候。外ニ懸り素読手習師拾五人被仰付候間、申談日々朝五時より九時迄、七人ヅツ罷出、諸事可致教諭候。子供の面々袴不及着用、平日遊の振合ニて差手候様、親々え申聞候。尤各始素読手習師、人数都合式拾式人え米百俵被下候間、銘々年中出勤の日数を以、夫々頂戴可被致候。」

教授陣の名、人数、各々の担当、講義等の実施時間などについて事細かに規定され、さらに頭取クラス以外の各担当者への報酬が明記されたのは管見ではこれが初である。同日の『会所日記』は上記に続けて、子供出入りの作法、墨ぬりや清書のやり方、年中行事、節句にちなんだ休日の規定、そして「子供為用便」などに至るまで各々条目を設けて規定する。さらにこの正月十三日付の担当教授の任命に関する記述には、四年前素読師に任命された庄(荘)田雅太郎が手習師も兼ねる旨が記されている。

學古館儒学の学統的、教義手法的特性

前節では、藩学「學古館」の成立と発展過程について、その設備、人材、諸規定の充実の様相を『会所日記』の記事と先行研究を参考にしながら考察し、同校が、天保十三年までに本格的な藩学としての体裁を整えた点を明らかにした。本節では、(1)「學古館」の儒学教育における使用教材とカリキュラムの特性について、(2)同校頭取以下、儒学教育を担当した教授陣がどの学統の人材であったか、さらに(3)教育の仕方にどのような特徴があったかを示す史料の検討を行う。まず、使用教材は、以下の教則に関する『会所日記』の記事が、『教育史資料』にもみられる。

一、教則

教科用書

考經・大学・中庸・論語・孟子・詩經・書經・易經・禮記・春秋・左氏伝・歴史・諸子百家の書
一、生徒区別

イ 童子生

ロ 冠者生

一、授業

一經書講義，毎月六の日（午前中で終一筆者）

二輪読討論，毎月六の日

三詩文会，毎月四回

四算術，毎朝辰時より午時迄

五国学，毎月三回

以下、国学、漢学、洋学、医学、習字、算術、軍学の授業科目と実施日・時間割、弓術、馬術、劍術、槍術、砲術、体術、水泳といった諸芸・武芸の、流派別の稽古時間割についての記述が続く。

久多羅木、木原両氏の研究にも既に指摘がある上の「教科用書」の項に羅列された漢籍類は、白杵藩においてのみならず多くの藩学教育においても定番となっていたものである。しかし実は、これら以外に、學古館の教義内容を示唆する漢籍類が多数存在することを、筆者は今回の調査で見出した。とくに組体、古義、亀井の学関係の諸書が多く、佐藤一斎の諸書も存在する。さらに、武藤、稲葉両学頭の師である東條一堂の四書『知言』全卷、『孝經兩造簡孚』、『学範』の初編、後編、『字義文理』の写本が存在する。前述したが莊田子謙は祖徠学派、學古館発展の基礎を築いた武藤東里（1754～1824、虎峰の祖父）、桐生朝陽（1757～1830）は古学派である⁽³⁰⁾。とくに莊田が学んだ時期に藩学頭取の地位にあった稲葉、武藤（虎峰）は、各々祖父、実父の薫陶をうけたあと江戸にて四年間、博学の東條一堂に学び、武藤は帆足万里にも学んだのは述べた。さらに莊田が童子生から冠者生に上がる時期には、中津藩校「進脩館」都講をつとめ、江戸の昌平校にも学び、硯学亀井昭陽にも私淑した白石照山も學古館藩儒をつとめていた⁽³¹⁾。1859～62年のことである。現白杵図書館蔵の旧蔵書類は、同藩学の儒学教育の学統的特性の一端を示唆するといえよう。

「教科用書」の項で『孝經』が第一番目に挙げられるのは他藩にも例があるが、稲葉、武藤が江戸で学んだ東條一堂は、『孝經』研究頗る多く、『増攷孝經鄭氏解補證』、『孝經兩造簡孚』、『古文孝經辨偽』、『孝經孔伝辨偽』、『孝經纂要』、『孝經資考』の六書を著している。『増攷孝經鄭氏解補證』には亀田鵬齋が序を付しており、そこで同書は「攷覈甚密，引照尤詳，深考鄭注，以發明今本經文之錯乱」するものと激賞している⁽³²⁾。

次に注目すべきは教則の「授業の方法順序及時間」にある、「冠者生 質議を本課とし 未熟の者は猶素読習字を為さしむ」、さらに「読書例目」の「六の日」において「午後輪読討論 冠者生之を為し 學頭助教之を監す」との文言⁽³³⁾。學古館の教務過程の特性として、おごなりの詰め込み教育ではなく、学ぶ側の能動性と参加意識の喚起、さらには思惟の自律性の開拓が重視されていたことが推知される。

天保十年代以降の白杵藩においては、諸藩諸士との学的交流活性化が目され、「俊秀の子弟は藩費を以游学せしめしこと」⁽³⁴⁾が奨励され、武藤、稲葉が江戸で学び、荘田も藩命により江戸、薩摩にて洋学を学び、明治二年より再び東京遊学を許され、慶応義塾に学ぶ機会を得たことは述べた。而して荘田は、明治初期までに、一方において藩学教育を通じて漢学を習得し、また一方では遊学等による開明的知識の獲得の機会に浴していたといえる。

白杵はまた、和漢の学や梵語に造詣深く、洋学にも通じ天保九年（1838）には徳川斉昭に招聘され、後には水戸藩士に列せられて金一枚三人扶持を賜るまでになった鶴峯戊申（1788～1859）の出身の地でもあり、また、幕府の天文方で洋学者、水野忠邦の改革にも参画した渋川敬直（六歳、1815～51）が流された場所でもある。鶴峯は天明八年に白杵八坂神社神官宣綱の長子として同地に生誕、武藤虎峰の祖父東里（吉紀）に儒学を学び、江戸にでて後天保三年（1832）に私塾を開いたほか、安積良斎らと交わった。水戸藩和書編纂所に出仕、斉昭の信任を得、外交経世の書を提出した⁽³⁵⁾。天保十一年に白杵に戻り、以降生涯在白、藩主にもしばしば拝謁、進講していた様子は自身の「日録」よりうかがえる⁽³⁶⁾。渋川は和漢洋の学に通じ、英文法の書『英文鑑』等も著し、水野忠邦の改革を補佐したが、忠邦失脚後の配流の地が白杵であった。ただ、渋川の来白は弘化二年（1845）で嘉永四年（1851）の七月には病に倒れており、鶴峯は天保十一年（1840）に帰藩後安政六年（1859）に病没するまで白杵を殆ど出なかつたようだが、弘化四年（1847）生まれの荘田への両者の直接的感化は考え難い。また、安政～文久期に白杵藩学の重鎮となった人物との接点を実証する史料も管見の限り見当たらず、前出の『荘田平五郎』も両者の直接的影響の可能性については明言を避けている⁽³⁷⁾。よってここでは、荘田が学齢期に達する直前の白杵は、多様な碩学の結节点的な様相を呈していたことを指摘するにとどめたい。

天保十四年（1843）七月六日の『会所日記』は、稲葉徳一郎大壑と武藤祝虎峰の学古館頭取就任を記録する。これ以前から、藩学の拡充策に様々なかたちで寄与してきた兩人であったが、頭取就任以降の『会所日記』には大きな学則、教則の変更や追加、設備投資についての記録はなく、学古館運営はいわば、安定期に入ったであろうことは、既に久多羅木氏の書に指摘がある。その中で特筆すべきは、嘉永六年（1853）、当時三十九歳で中津藩放逐となった白石照山の招聘である。照山の学的特性については別稿で触れるが、理由は判然とせずとも他藩放逐となった人物を招き、六年後には頭取とした。これ以前は、藩学の最高位であった頭取のみならず、すべての教職関係者が白杵藩士であったことを考慮すると、天保以降文久期に至るまでの学古館、そして稲葉、武藤両頭取の斬新さ、学的合理性が顕著であるといえよう。

安政二年（1855）に童子生となった荘田は、天保十四年までに整備拡充された体制のもと、稲葉一武藤体制に白石を加えた陣容のもと勉学に励んだ。安政六年に照山が頭取となり、その翌年に荘田は冠者生として、照山指導下で質議・討論の奨励を特徴とした漢学教育を受ける。その上で、英学修行のため慶應三年（1867）三月に、江戸へ出発すべしとの藩命を荘田がうけた事実は、同年正月十三日の『会所日記』にみえる。本稿は、白杵藩藩学の発展とそこでの教育の特徴を示唆する史料の検討を中心としたが、このような性質の学古館教育、とくに漢学教育が荘田の思惟形成にどの

ようなかたちで反映されたかについては、別稿（注27）をもって詳述したい。

注

- 1 莊田の伝記には、宿利重一『莊田平五郎』（対胸舎、1932年〈1998年ゆまに書房より復刻〉）がある。柴孝夫氏は、莊田の経済諸雑誌における発言から、彼の経営者としての行動と思想とを跡付ける試みを行う（柴「莊田平五郎の言論活動とそこに現れた事業観―日清戦争後の経済雑誌上での所感をめぐって」〈『経済学論究』〔関西学院大学〕第52号〉）。しかし、彼自身による著述物は、日記、書翰、手紙の類が宿利氏の『莊田平五郎』所収のかたちで残る以外は殆ど無いことは、これ迄莊田研究に携った諸学が一致して指摘するところである。
- 2 とくに莊田個人の企業者活動を個別に記録したものではないが、三菱社誌刊行会編『三菱社誌』（東京大学出版会、1980年）のとくに十四、十五巻には、莊田の同社における活動の記録が多くみられる。また、三島康雄（編）『日本財閥経営史 三菱財閥』（日本経済新聞社、1981年）、とくに第一章「三菱財閥の人間像」、土屋守章、森川英正（編）『企業者活動の史的研究』（日本経済新聞社、1981年）、とくに「岩崎弥之助時代のトップマネジメント」も莊田について触れる。
- 3 莊田の三菱長崎造船所での活動については、『三菱社誌』のほか、『三菱長崎造船所史1』（三菱造船株式会社社長崎造船所職工課、1928年）、塩田泰介『自叙伝』（1936年）等がある。
- 4 莊田雅太郎の白杵藩藩学「学古館」での履歴は同藩『会所日記』（白杵市立図書館蔵）に記載がある。
- 5 『先哲叢談』続編には、子謙の徂徠、服部南郭らへの師事、藩儒としての従事が語られている（後に本文にて記事を引用）。
- 6 文部省総務局（編）『日本教育史資料』（文部省、1890～92年）。
- 7 白杵藩『会所日記』は現在、白杵市立図書館に全冊所蔵がある。筆者は今回同『日記』閲覧において、同市文化財課岡村一幸氏にご尽力いただいた。ここに感謝の意を表したい。尚、特に天保はじめより末までの『会所日記』に學古館関連の記述が多いのは、この時期における同館の整備の進展を反映する。
- 8 白杵郷土史家吉田稔氏蔵。
- 9 『白杵史談』（白杵史談会編）第38号（1941年）、第40号（1942年）、第41号（1943年）に各々所収。
- 10 印刷、発行 著者、1985年、非売品。
- 11 「白杵時代考」一は『白杵史談』31、二は同32号に掲載。
- 12 前掲『日本教育史資料』巻八（第三分冊）、94頁。
- 13 同上、94～5頁。
- 14 前掲『日本教育史資料』とそれについての研究である笠井助治『近世藩校に於ける学統学派の研究』上・下（吉川弘文館、1960年）は、各藩の武士子弟の教育環境の充実の度合の違いを呈出する。白杵藩の藩学整備は天保期をまつ。
- 15 同藩天保改革については宮本又次「白杵藩天保の改革」（宮本又次〈編〉『藩社会の研究』〈ミネルヴァ書房、1960年〉）に詳しい。
- 16 木原、前掲『白杵藩教育史』、23頁。
- 17 前掲『日本教育史資料』巻八（第三分冊）、95頁。
- 18 木原、前掲『白杵藩教育史』、23～5、31～3頁。
- 19 前掲『日本教育史資料』巻八（第三分冊）、94頁。
- 20 既に述べたように學古館の「経始」は天保七年、独立の「文館」成立は天保十三年である。
- 21 前掲『日本教育史資料』巻八（第三分冊）、95頁。
- 22 同上、95頁。
- 23 兵学研究としては有馬成甫（北条流、他）、佐藤堅司（甲州流）、広瀬豊（山鹿流）、島田貞一（楠

流)の諸氏のものが代表的であり、特に有馬氏が主導的地位にあった。戦前にも軍事史学会の『軍事史研究』(1936年創刊)など、時代状況に拘泥しない兵学の歴史学的研究論文も多数擁する学術誌があった。有馬(監修)、石岡久夫(編)『日本兵法全集』全七巻(人物往来社、1967年)は、甲州流、越後流、北条流、山鹿流、長沼流の五大兵法を各巻にて取り扱っているほか、他流派も掲載された膨大な兵学資料集である。また、石岡氏の『日本兵法史』上下二巻(雄山閣、1972年)、『山鹿素行兵法学の史的研究』(1979年)も有用である。

近年の兵学研究書では、前田勉『近世日本の儒学と兵学』(ペリカン社、1996年)、古川哲史監修、魚住孝至、羽賀久人校注『戦国武士の心得「軍法侍用集」の研究』(ペリカン社、2004年)がその代表格といえよう。尚、各藩の流派の採用状況については、『教育史資料』を参照されたい。

- 24 木原、前掲『白杵藩教育史』、20頁。しかし木原氏はあくまで「発展形態」としての類似性を指摘するにとどまることは留記しておく。
- 25 同上、17～23頁。
- 26 これに加え、宿利氏は、子謙以来の荘田家の“実学志向”の系譜を指摘する。宿利、前掲『荘田平五郎』、158～66頁。
- 27 『21世紀アジア学会紀要』次号掲載予定。
- 28 木原、前掲『白杵藩教育史』、37頁。またこれは、宿利氏も上の伝記で指摘する。
- 29 一堂については拙稿「東條一堂の『權』論」、鶴田恵吉『東條一堂伝』(東條卯作<刊>、1953年)を参照されたい。
- 30 荘田子謙についてはさきの『先哲叢談』後編のほか、「荘田子謙碑銘」(『教育史資料』巻八、巻十二所収)がある。武藤東里、桐生朝陽についての記録は希少だが、その学統については、「武藤先生墓碑」(『教育史資料』巻八、巻十二所収)、「桐生朝陽先生碑銘」(同)によった。
- 31 白石が来白し、十人扶持が付されたことは『会所日記』安政元年五月十一日の記事、学頭就任の一件は同六年の記事にある。
- 32 鶴田、前掲『東條一堂伝』によると、ここに挙げた一堂の『孝経』関係六書は東條家蔵であったが、これらは全て写本で、現在、千葉県茂原市立美術館に寄贈され保存されていることを筆者は確認した。
- 33 前掲『日本教育史資料』巻八(第三分冊)、95頁。
- 34 前掲『日本教育史資料』巻八(第三分冊)、94頁。
- 35 鶴峯に関しては藤原暹『鶴峯戊申の基礎的研究』(東京総合企画<株>1973年)がある。
- 36 鶴峯「日録」(藤原『鶴峯戊申の基礎的研究』所収)。
- 37 宿利、前掲『荘田平五郎』、178～90頁。